
東方大妖精

人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方大妖精

【Nコード】

N9114P

【作者名】

人

【あらすじ】

チルノのことが大好きな大ちゃんががんばるお話。

第一話 私は大ちゃん（前書き）

こんにちは、人です。

今作は見切り発車となっております。

ですので大変ごちゃごちゃとしたものになっております。

ご都合主義に独自解釈・設定などなんでもござれ、です。

内容を書きながら考えておりますので、更新速度は期待できません。

さらに、あらずじほどシリアスじゃないです。

それでは、どうぞ。

ああ、言い忘れていましたが、大チルは俺のアイシクルフォール。
あとルーミア大好き。美鈴最高。

第一話 私は大ちゃん

深く暗い青色の広大な湖。その上に垂れ幕の様に覆いかぶさっている薄い霧。

空に広がるのは、どこまでも続く明るい青。そこに霧以外に白色は混じらない。

天上にはさんさんと太陽が照っており、その日差しは暖かく心地いい。

時折霧に反射して、虹色に光ることもある。それを見たものは、幸せになれるなんて噂もあるくらいだ。

ここは、幻想郷の霧の湖と呼ばれている場所。

額に手をかざして太陽光をさえぎり、辺りを見回す。多分、こっちの方に行ったと思うのだけれど。

いつも私はこの湖で友達と遊んでいる。今日も、いつもと同じように友達と遊んでいたのだけれど、その友達は、にじがみえた！何て言って、こっちの方に飛んで行ってしまった。

「まったくもう！追いかけてこするって言ったのはチルノちゃんなのに」

そんな風に悪態をついてみるけど、本当に悪く思ったりはしていない。私の友達のチルノちゃんは、興味の対象がころころとすぐに変わってしまうのだ。長い付き合いだから、今はもう気にしてない。

「チルノーちゃん！」

手を筒状にして口にあてて、大きな声でチルノちゃんを呼ぶ。
湖の奥のほうまで声は響いていったけれど、チルノちゃんの返事は無かった。

変わりに、この湖にいる妖精たちが顔をのぞかせた。

そう、妖精。私も、友達のチルノちゃんも。その証拠に、私の背には羽がある。

縁のついた透き通るような羽。私の少ない自慢のひとつ。

「ねえ、チルノちゃん見なかった？」

近くにいた妖精に声をかける。その妖精は、何も言わずに私が向かって行こうとしていた方にひとさしゆびを向けた。

ありがとうとお礼を言って、その方向に飛んでいく。

私の緑色の髪が横から吹いてきた強い風になびいて、顔にかかった。かかった部分は、ちょうど私が左の頭のほうで結んでいた髪だった。そういえば一度だけ右側で結んだことがあったけれど、あの時はチルノちゃんに「誰？」って言われて慌てたなあ。

昔の懐かしい記憶を思い出しながら、顔にかかった髪の毛を払う。それから、少しスピードを上げた。

しばらく進んでいくと、見覚えのある背中を見つけた。青い髪に、後ろ頭で結ばれた大きな青いリボン。青いワンピースに、氷で出来た羽。

「チルノちゃんっ」

キツと急ブレーキをかけて、チルノちゃんの横に止まる。チルノちゃんは左手を右の肘に当てて、右手をあごに添えてなにやら神妙な顔つきで俯いていた。

が、すぐ私に気がついて、顔を上げる。

「お、大ちゃん。どしたの」

あう、やっぱり。がつくりと肩を落とす。私のこと、忘れてたのね。ちなみに大ちゃんって言うのはチルノちゃんがつけてくれた私の愛称。

他の妖精とかには、大妖精って呼ばれている。

「どうしたの？じゃないよ、チルノちゃん。なんで一人で先行っちゃうの」

確かにチルノちゃんは興味の移り変わりが激しいけれど、私といったことを忘れるなんてあんまり無いのに。

忘れられていたことにちよつと怒って、ぶんぶんしながらチルノちゃんに言う。

チルノちゃんはおごから手を離して腕を組んで、大きく首をかしげた。

「あたいはずつとここにいたけど？」

うそ、とほつぺを膨らませて言う。だって、チルノちゃんが同じ場所に長くいるなんておかしいもの。槍が降ってきちゃうよ。

するとチルノちゃんは、斜め上空に向かって人差し指を立てた手を

伸ばした。

「あたいね、あれみてたのよ」

あれ？あれって、なあに？

チルノちゃんの指差す方向に目を向けてみるものの、そこには青空が広がっているだけだった。

何も無いよ、と言葉には出さずに、表情で訴えるべくチルノちゃんのほうを見た。

チルノちゃんもこちらを見てきて、うむ、と頷く。わあ、私の意志がぜんぜん伝わってないや。

「でっかいにじ」

虹？それって、あの見たら幸せになれるっていう？あつたかな、と再び指がさされている方向を見る。……あ！あつた！薄くて大きくて、見えにくいけれど、『虹があるのかな』って思ってみてみれば、確かに見える。

「きれい……」

ほう、と胸元で両手を合わせて、息を吐き出す。隣ではチルノちゃんが目をつぶって、うむうむ、と意味ありげに頷いていた。…あれ？でもなんで、あの虹は霧の中じゃなくて空にあるんだろう。

「さすが、サイキョーのあたいね。幸せの虹を見つけるなんて」

そう思っていると、チルノちゃんが得意げに言った。

くすり、と思わず笑みをこぼした。いつも通りだ、ああやって自分に感心したりするのも。

そこが、チルノちゃんの魅力のひとつでもあるのだけれど。

私は、あんまり自分を褒めたり出来ないから、余計チルノちゃんのそういうところが際立っているように感じてしまふ。ちよつとうらやましいっていうかな、素直な感じとか。

そんなことを思いながら見ていると、すでに二十四回を越えるうむを言い終わったチルノちゃんが突然顔を上げて、ぱん！と手を打った。

「にじといえばんばんじゃない！さっそくいくわよ大ちゃん！！」

え？えっと、虹色の弾幕を放つから美鈴さんなの？ってああ、速いよチルノちゃん！おいてかないでよー！

あわてて私は、もう遠くに見えるチルノちゃんの背を追って飛んだ。

何とかチルノちゃんに追いつく。小さく息を吐きながら、スピードを落とした。

私がそばに行っても、チルノちゃんは前を見たままだった。

もう、少しくらい声をかけてくれたりしてもいいのに。ちよつとさびしくなつて、もうひとつため息をついた。

ふと、視界の端にバタバタとスカートがはためいているのが見えた。そちらに目を向けると……………ああっ！見えそう！見えそうだよチルノちゃん！！

「…ん？どしたの大ちゃん。顔が赤いよ？」

「ななな、なんでもないよ！？うん！なんでもないなんでもない！」

ばたばたわたたと両腕を大きく振って否定する。ほ、ほんとになんでもないんだってば！

そんなに見られると、恥ずかしいよ…。

両手で顔を覆ってなんでもない、落ち着けわたし！とぶつぶつ言っている、チルノちゃんが「おっ」と声を上げた。

顔から手を離して、顔を上げると、ちょうど向こうから黄色っぽい金髪の髪の女の娘が飛んでくるのが見えた。

「よっ。ルーミア」

ゆっくりと速度を緩めて止まったチルノちゃんが、片手を挙げて挨拶をする。

私たちの前まで来て止まったルーミアさんは、同じように手を上げて答える。

それから、こちらに身体を向けてきて、

「こんにちわー、大ちゃん」

「こんにちは、ルーミアさん」

両手を身体の前で合わせて、ぺこりとお辞儀をする。

ルーミアさんは、短いその黄色の髪をわしゃわしゃと掻きながら、困ったような顔で、そんなに畏まらなくてもいいのに、と言った。

この人は、ルーミアさん。私たちと違って力のある妖怪だ。見た目は可愛いしいけれど、人里の人間に恐れられている。ルーミアさんが言うには、人を食べていたのはもうずっと昔の話、らしい。

ただ恐れられているなんて言っても、ルーミアさんは優しいから、

外から迷い込んできた人間の道案内をしてあげたりしている。容姿がこうだから、外から来る人はルーミアさんを恐れたりはしないんだって。

金髪のショートボブに、左側頭部に結ばれた赤いリボン。真っ白な襟と長袖に、黒い洋服。スカートはロング。胸元に、ネクタイのように赤いリボンがたれている。

私よりも少し身長は低いけれど、時々大人っぽい仕草をする時がある。ともするとドキッとしてしまうこともある。

「こおまかんからきたみたいだな」

チルノちゃんがそう言った。こくりと頷くルーミアさん。片手で額にかかった髪を耳にかける仕草と、眠たそうに少しまぶたが下がっている目が、なんだか不思議な雰囲気を出している。

ルーミアさんは、ゆつくりと瞬きをしてから、私たちの笑顔とは違う、口の端を少し上げるだけの笑顔になって、口を開いた。

「美鈴とちよつと遊んできた」

「またこてんぱん？」

「うん、こてんぱんよ」

にこりと、紅い目を細めて笑う。その首を数ミリほど傾けて、

「わたしがね」

ニカツとチルノちゃんも笑った。ニヒルな笑みっていうのかな、それとも、ワイルドっていうのかな。

そんな風に笑うチルノちゃんの顔は、すごく格好良かった。

ふわふわと移動して、私たちが今来た道をゆっくり移動していくルーミアさん。

チルノちゃんは、ルーミアさんを見て、紅魔館の方を見て、それから、ルーミアさんの隣に飛んでいった。そうすると思っていたので、ぴったりとくつついていく。

「これからどこに行くんだ？」

ルーミアさんに並飛行しながらチルノちゃんが聞いた。

うん、と呟くルーミアさん。私はチルノちゃんを挟んで飛んで、ルーミアさんの言葉を待っていた。

「リグルン家にね。そこにミステリアもいるだろうし」

ほう、とチルノちゃんが呟いた。私は、じゃあ森の方に行くんだ、久しぶりだな、リグルちゃんたちに会うの、と思っていた。

しばらくは無言で飛んだ。数分ほどそうしていると、湖の終わりが近づいてくる。その先に広がるのは、深い緑の森。

私たちよりも頭ひとつぶん先に進んでいたルーミアさんが降下し始めたのにあわせて、チルノちゃん、私と続いて地に降り立った。ここから歩きで森へと入っていく。

私は詳しいことは知らないのだけれど、この森には歩いていけないと入れない、らしい。

進んでいけば、頭上は木々に生い茂る葉に覆われて、足元には太い根っこが露出し始める。

ひよいひよいとそれをまたいで私たちは奥へと進んでいく。

所々に差し込む日の光に、森に満ちる生き物たちの声、湿気に反射する太陽光。目を癒してくれる緑たち。

思わず目を細めて胸に手を置いて、体中でそれを感じていたくなってしまう。

それほどまでにここはきれいで、それでいて穏やかだった。

ここは、魔法の森と呼ばれる森。多湿の森で、夏に来るとひどく蒸し暑くなる場所。

こここの奥地にリグルちゃんの家があるのだけれど、そこにいくまでにはいろいろと苦労があったりする。

確かにここは穏やかできれいに感じるけれど、実はここには危険な妖怪たちがたくさんいるのだ。

妖怪って言うのは、なにもルーミアさんの様にみんながみんな優しいってわけじゃなくて、人間でも、妖怪でも見境なく襲って食べてしまったりするものもある。そのなかに、妖精だって含まれてしまう。

故にあまり心休まる場所じゃないんだけど、それでもこうして静かに歩いていると、どうしても穏やかな気持ちになってしまおうというか…。

遠くから、森を流れる川のせせらぎが聞こえてきた。思わずそちらに顔を向けて歩いていると、木の根に足を取られた。

「きゃっ!?!」

たおれる! そう思ったとたんに、ふわりと抱きとめられた。このひんやりとした感触は…。

「まえみであるかないとだめだぞ、大ちゃん」

顔が赤くなっていくのを感じた。なんだろう、すごく恥ずかしくて、今すぐにでも駆けて行きたいなんて衝動に駆られる。

それを何とか押し込めて、俯きながらチルノちゃんの肩に手を置いて、体勢を立て直した。チルノちゃんが顔を覗き込んでくるものだから、あわてて離れる。

「またかおがあかくなってるぞ。なぜか？大ちゃん」

「ううん！？だ、大丈夫だよ！？風邪じゃないよ！？」

ぶんぶんと手を振って否定する。

あうっ、チルノちゃんにいらない心配をさせてしまった。わたしの馬鹿…。

頭を抱えて自己嫌悪に落ちていると、ぱっと、手をとられた。

「いこ」

短くそういって、私の手を握ったまま、向こうでこちらに体を向けて立ち止まっているルーミアさんのもとへと駆け出すチルノちゃん。私は引っ張られて、何とか転ばないように駆けながらも、握られた手の冷たさに、それなのに暖かくなる心に、顔を赤くして俯くのであった。

第一話 私は大ちゃん（後書き）

描写を細かく書く練習も兼ねております。

感想をくれると大変喜びます。しかしむやみにやると調子にのりま
す

第二話 あたいゆめのなかのチルノ（前書き）

ひどいもんさ（ストーリー構成的な意味で）。

第二話 あたいゆめのなかのチルノ

雷鳴が轟く真つ黒な雲が空を覆っていて、鼓膜を打つような轟音とともに幾筋もの雷があちこちで地へと落ちていく。轟々と風が流れて湖は荒れて、高い波が嵐の海のようにうねっている。

ついには雨まで降り始め。まるでこの世の終わりともしいわんや光景の中に、一人。

薄水色の髪に、青い大きなリボン。氷の羽に、白いシャツの上から着ている青のワンピース。

ふと、その少女が振り向いた。豪風をもものともせずには浮きながら、強い意志の光がともった青い瞳でこちらを見据えてきた。

キリリと締まった眉をさらに寄せて、固く閉じられていた口を、ゆつくりと開いた。

『大ちゃんは、あたいがまもるから』

ごおう、と強風が襲ってきた。顔を守るためにかざした手を見てようやく、私は自分が誰なのかを知った。

ボンッ！と雲を突き抜けて、雷を纏った何かが私を見据える少女へと襲い掛かった。

『チルノちゃんっ！！』

思わず、叫んだ。

しかし、私の声を受けてもチルノちゃんは動かなかった。

雷を纏った何かがチルノちゃんへと肉薄した刹那、ようやっといった風に緩慢な動作で腕を上げる

瞬間、どおん！と、まるで勢いよく壁にぶつかったような音がして、

チルノちゃんを中心にして爆風が吹き荒れた。

スカートと髪の毛を押さえて、片方の目をつぶりながらも、何とかチルノちゃんの姿を目に入れ続ける。

チルノちゃんの後ろに、まるで顎を殴り上げられたかのような体勢で止まる少女がいた。

薄クリーム色の、短髪。その髪の間隙に、短い角が見えた。

くるん、チルノちゃんが少女のほうへと振り向く。そのまま自然な動作で、少女の腹へと膝を叩き込んだ。

ドゴォー！と、人を蹴ったとは思えない重すぎる音が響く。

くの字に身体を折った少女の顔はしかし、とても楽しそうだった。

その少女へと、両手を組んで振り上げていた腕を、チルノちゃんはためらいなく振り下ろした。

重い音と、衝撃波。

勢いよく荒れた湖面に叩き付けられた少女は、高い高い水柱を上げて、そして二度と上がってくることはなかった。

ザアザアと降りしきる雨に打たれながら、チルノちゃんへと顔を向ける。こんなにも激しく雨が降っているというのに、チルノちゃんは濡れていなかった。

私がチルノちゃんの下へと飛んで行こうとした時、遙かかなたの方でぴかりと光るものがあつた。

それは、数秒もせずに太い光線となって押し迫ってきた。

紅魔館をも飲み込んでしまえそんなその黄色い光線は、あの魔法使いの人が使うものにひどく似ていた。

『うがあああつー！』

気合の音が響く。両手に握りこぶしを作って、中腰で叫ぶチルノちゃん。その身体から、ボッシュウ！と光が炎のように噴出して、纏わりついた。迫る光線に構えるその身体には、青い光がバチバチと音を立てて帯電していた。

『ぜらあああああッ！！！』

ブン、と、チルノちゃんが右腕を斜めに振り上げる。

振り上げられた腕は、チルノちゃんの目と鼻の先にまで迫っていた光線にぶち当たって、光の粉を撒き散らす。

一際強くチルノちゃんの身体から噴出する光が大きくなった。帯電する光が、目に見えて増えていく。

大きな太鼓を叩くような音。そして、明後日の方向へと伸びてゆく光線。

まばゆい光が、あたりを照らしている。不思議と眩しくはなかった。光線は暗黒の雲へと突っ込んでいき、大きく円を描くように霧散させた。

一部分だけ、光が差し込む場所ができた。といつても、その大きさは想像を絶するものだった。

キッ！と音を立てるようにして、光線が飛んできた方向をにらみつけるチルノちゃん。その背にある透明の羽が、太陽の光に当たって場違いに思えるほどきれいだった。

いつの間にか、チルノちゃんの前に一人の女性が立っていた。

癖のある緑色の短い髪の毛、鋭い眼光にともるのは赤い光、にやりと口角を吊り上げて笑う表情は、一見やさしそうに見えたが、しかし恐ろしくも見えた。その手には、不思議な傘。

白いカッターシャツに、チエツクの入ったロングスカート。大きな胸の元に黄色いリボンがたれていて、羽織ったチエツク柄のベストと一緒に激しくはためいていた。しかし何故か、長いスカートはそよ風にでも揺らされているのかと思えるくらいにしか動いていなかった。

『大ちゃんにはゆびいっぱんふれさせない』

風見幽香と呼ばれるその妖怪を厳しい表情で睨み付けながら、チルノちゃんが言った。

その言葉に、とてもうれしくなってしまった。

口元に手を当てて、くすくすと風見幽香が笑った。それから、後ろに回っていた両手を解いて、傘を武器に見立てるようにして構えて、表情を恐ろしく歪めて言った。

『フフ…。今度は、そううまくいくかしらね？』

瞬きをした後には、二人はすでに息がかかるほどの距離まで近づいていた。

そして、ただ近づくだけではなかった。風を裂いてしなる強烈な蹴りを、チルノちゃんは片腕で防いだ。

その重さに、ぐらりとチルノちゃんの体が傾く。先ほどとは違った、焦っている様な、厳しい表情。

反撃に、殴り返す。

凄まじい音と、衝撃波があたりを襲う。そこからはもう、私の目には見えなかった。

重い音。風を裂く音。轟々と、天候とは関係のない強風。

私には、そこから飛ばされないようにすることだけで手一杯だった。うすく細めた視界には、あちこちで現れては消え、激しい攻防を繰り返す二人の姿。

急に、その二人を中心にした強い光があたりを照らした。

と思ったら、弾かれる様に風見幽香が吹き飛んでいく。

さっきまで二人がいた場所には、衣服がボロボロになったチルノちゃんが歯を剥き出しにして息を荒げて浮いていた。右肩は袖が無くなっている、肩から血が流れている。左手でそれを庇う様にして、チルノちゃんは浮き上がってくる風見幽香を睨み付けていた。

あまりのそうていに、思わず口元を手で覆う。でも、目をそらしたくなかった。そうしてしまうと、チルノちゃんに申し訳なく思える

気がして。

風見幽香は、最初の余裕などかけらもない、それだけで殺せそうなほどの形相でチルノちゃんと対峙する。その手には、傘はもう握られていなかった。

今度は、すぐに距離を詰めたりはしようとしなかった。

『その有様で、まだ守るとかいう気がしら？』

ブン、と顔を振った風見幽香が、嘲笑を含めてそういった。チルノちゃんは苦しげに息を荒げて、睨め付け続ける。かみ締めた歯の間から、搾り出すように息を吐き出して、吸い込むと同時に口を開いた。

『あたいはあきらめない。たとえしんだって。まもると、きめたから』

ブウ……ン。

チルノちゃんを中心に、黄色の光の球ができる。表面が安定していなくて、時々揺らめくそれは、チルノちゃんの力の塊だった。すっと、指を力なく折った、開かれた手を重々しく上げるチルノちゃん。上げた右腕を、呼吸に合わせてゆっくりと腰に持つていき、下へと向ける奇妙な構えを取った。

『馬鹿ね。そんな抵抗さえしなければ一瞬で楽にしてあげたのに。いいわ、全力で消し飛ばしてあげる』

完全に余裕を取り戻した風見幽香が、両手を合わせるように近づけて、しかし合わさずに前へと突き出した。それを、チルノちゃんと同じように、腰だめに持つていく。

チルノちゃんとは違って、両手で。

私は、気が気じゃなかった。チルノちゃんに傷ついているというの
も理由のひとつではあったが、それどころではない。このままじゃ
…。

風見幽香を中心として出来た黄色い光を見て、確信した。

あれは、チルノちゃんの力よりもでかい、と。それぐらい、私にだってわかった。

くたばれええええええ！！！！

傷ついているチルノちゃんよりも、風見幽香のほうが力を溜めるのは早かった。

叫びながら両腕を突き出す。すると、風見幽香を中心とする光球から、光線がのびた。

ぞつとするほど明るい光を放つそれは、本当はすごい速度でチルノちゃんへと迫っているのだろうけれど、何故かゆっくりに見えた。迫る風圧に、チルノちゃんの残っている衣服が激しくはためいた。今度は、さっき見たいにははじけない。

あたるかどうかといったときに、チルノちゃんが右腕を突き出した。目と鼻の先で、光線が押しとどめられる。

にやにやと、風見幽香が笑っていた。わざとだ、長くチルノちゃんを苦しめようと…！

思わず飛び出していった。許せなかった。こんなときにまで、怯えようとしてゐる自分が。

「ぎっ……あああ……！！！」

目を見開いて、齒を食いしばって、力いっぱい光線に右腕を押し付けるチルノちゃん。

がくがくと、押し付ける腕が揺れていた。

つらそうだった。私なんかよりも、ずっと。

『チルノちゃああああん!!』

どん!と、その身体に抱きつくようにして押しとばす。驚くほど軽い手ごたえとともに吹き飛んで行ったチルノちゃんは、啞然としていた。まるで、目の前のことが信じられない、なんていった風に。

『なっ!?!』

ゆっくいと動く世界で、何故か焦ったように叫ぶ風見幽香の声が聞こえた。

ごめんね、チルノちゃん。私、やっぱり…。

最後まで考えることも出来ずに、私は飲み込まれた。

遠くから、声が聞こえてきた。

『まもるって……！！いったのに、あたいはっ！！！！』

チルノちゃんの声だった。大丈夫だよ、チルノちゃん。私は、なんともないから。

……あれ、身体が動かないや。なんだか、胸から下が無くなっちゃったみたい、何にも感じない。

どうしてかな。目を開いてるはずなのに、すごく暗い。……ううん、でも、チルノちゃんの顔が見える。

霞んでるけれど。

ぼろぼろと涙を零すチルノちゃんに、大丈夫だよって言って安心させてあげたかったけれど、口が動かなかった。手を伸ばして、ほほを撫でてあげたいのに。涙を、すくってあげたいのに。

チルノちゃんの涙が顔に落ちてくる。何粒も何粒も落ちてきて、まるで私が涙を流しているみたいに伝い落ちて行く。
チルノちゃんの涙は、とても熱かった。

『ああああああああああああああっっ』

長く、長く、上を向いてチルノちゃんが叫び始めた。

悲しさしかこもってなくて、どうにかしてあげたくて、でもどうにも出来なくて。

ぼろぼろと零れ落ちる雫が、チルノちゃんの身体から発生している小さなスパークにあたって、はじけた。

近くに、風見幽香が降りてきた。

『予想外だったけれど、生きていれば差し支えはなさそうね』

そんな。よくのわからない事を言っで、こちらに歩いてくる。まるで、チルノちゃんの声が聞こえていないようだった。

バチバチと、チルノちゃんの身体から発生するスパークが強くなっていた。

ぐぐぐ…と、まるで魔法のように、私の好きなチルノちゃんの髪の毛が伸びて行く。

風見幽香の足が、止まった。

『…どつ、うして…！？どうして！？貴女のどこにそんな力が…？』

心底驚いているような、若干の恐怖が混じったような声。

チルノちゃんは、もう叫んでいなかった。すっと立ち上がり、顔だけを風見幽香へと向けて、屹立する。

ふくらはぎ程まで伸びた薄水色の髪が、帯電しながらひと纏まりに風になびいていた。

『あ……ああ、あ』

愕然とした声、表情。一步、後ずさる音が聞こえた。

依然変わらず、チルノちゃんは鋭い眼光を風見幽香に叩きつけている。

一步、チルノちゃんが踏み込めば、風見幽香が下がる。完全に、怯えていた。

『おまえはもう……あやまつてもゆるさないぞ』

チルノちゃんが消えて、何かが爆発するような音と、引き攣れた悲鳴のようなものが聞こえてきて、そこまだった。もう何も考えられなくなって、目を閉じた。それから、ゆっくりと意識が遠ざかって…。

「お、おきたか大ちゃん」

よく知った声で、私は目を開いた。何か、柔らかいもの、布団だろうか…、それに身体を横たえていたようで、私の顔を覗き込むように、チルノちゃんが覆いかぶさってきていた。

驚きや、恥ずかしさなんかよりも、安堵が大きかった。

「チルノちゃんっ！」

「おお！？ど、どーしたんだっ！？」

がばつと、抱きついた。チルノちゃんチルノちゃんチルノちゃん！とほお擦りをする。なりふりかまっていられなかった。

とにかく嬉しくて、ぎゅうと抱きつく。チルノちゃんはわたたと腕を振り回して、困惑していた。

今は、このひんやりとした冷たさが心地よかった。私の求めている冷たさ。

柔らかい肌が、硬い羽が、何もかもが。

とにかく、今は抱きついていたいと、力いっぱい抱きついていた。

ガチャリと、ドアが開く音が聞こえてきた。

「どう？チルノー？大ちゃん起きたー？」

入ってきたのは、この家の主だった。

「おおっ！リグル！たすけてくれ！大ちゃんがこわれたっ！」

チルノちゃんが大慌てで助けを求める。壊れたなんて、ちょっとひどい。

「じっ、じきっ、ごゆっくりい」

パタン。

なんだか妙なことを口走って、リグルちゃんが行ってしまった。

いや、今はそんなことはどうでもいいの。ここがどこなのかとか、関係ないの。

「チルノちゃんチルノちゃんチルノちゃんっ!!」

「のあああああああああああああ!?!」

そうして私は、正気を取り戻すまでチルノちゃんの胸にほお擦りしていた。

気がついたときには、チルノちゃんは真っ白になっていて、ドアから覗いていたリグルちゃんとミスティアさんの視線が痛かった……。そばによつてきたルーミアさんが私の肩に手を置いて、妙に無邪気そうな顔で、

「らぶちゃはしぬのかー?」

なんて、本当に何を言っているのかわからない事を、へんてこな口調で言つて、相思相愛なのかそーなのかー、と歌みたいに口ずさみながら、貼り付けたような笑顔で部屋から出て行った。

私はもう、だめかもしれない…。

第二話 あたいゆめのなかのチルノ（後書き）

どうやってリグルたちとあわせよう、森の中で妖怪とでも遭遇させようか…と思っていたらこうなった。
すぐこうなる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9114p/>

東方大妖精

2011年1月9日02時35分発行